

階名唱指導上の課題2

—幼児教育専攻学生の視唱の現状から—

吉田直子

(京都教育大学教育学研究科修了)

Addressing Issues in Teaching Solmization 2

—from Survey for Kindergarten Trainees—

Naoko Yoshida

2014年11月30日受理

抄録：ドレミをカタカナ文字で示した5題の階名唱課題を歌わせ、被験者の視唱内容を分析した。旋律を正しく把握できない被験者では、階名と音階音程が結びついていないだけでなく、階名の音程が5度跳躍する部分で主音の「ド」の音高が移動して転調しており、階名では正しい旋律音程の把握が不可能になっている例が多く見られた。階名で旋律の音程を正しく把握させるためには、階名と音階音程を正しく関連づけることに加え、安定した調性感を育成する必要があることがわかった。このためには専門的な指導の継続が求められる。

キーワード：階名唱 「移動ド」 視唱指導 音程把握 調性感

I. 研究の目的

本研究は、幼児教育専攻学生の階名唱の現状から問題点を分析し、楽譜から聴取することなく簡単な旋律を視唱できる能力の育成のために、「移動ド」を用いた指導（以下、階名唱指導）改善のための示唆を得ることを目標としている。

音楽科教育における階名唱指導については、平成20年改訂『学習指導要領』において、「相対的な音程感覚を育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること」（『小学校学習指導要領』）、「相対的な音程感覚などを育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること」（『中学校学習指導要領』）として、指導のねらいが明記された。『小学校学習指導要領解説 音楽編』には「相対的な音程感覚などを育てる」とは、「各長調の主音をドとし、各短調の主音をラとした階名唱において、音程の間隔を相対的に感じ取る力を育てることである」（2010：90）とある。『中学校学習指導要領解説』には「移動ド唱法を用いて、楽譜を見て音高などを適切に歌う活動を通じて、相対的な音程感覚を育てるだけでなく、歌唱における読譜力を伸ばす」（2010：61）とあり、子どもたちが適切な教材で階名唱を適宜用いた学習を継続することによって、相対的な音程感覚を身に付け、旋律の読譜力や視唱力を習得することが期待されている。

しかし、「歌唱指導における階名唱については、移動ド唱法を原則とすること」とした従前の『学習指導要領』のもとで、学校音楽教育における階名唱指導は「難しい」ことを理由に敬遠され（2005 小川：51）（2007 杉江：21）、生徒の読譜や視唱能力において十分な成果を上げてこなかった状況は今までに多く指摘されてきている

（2007 杉江）（2009 斉藤）（2009 畑中）。学校音楽教育は単に技術習得を目標としているわけではない一方で、技術面での「できない」が「できないままで放置」され、努力による達成感や自己有能感を持っていない時、生徒が学びの意欲や楽しさを感じることは難しいことも指摘されている¹（2013 笹野：248）。簡単な旋律が視唱できるための道筋を生徒に示すことを可能にするために、階名唱指導について今一度検討することが必要だろう。

これまで我が国での階名についての研究は、「移動ド」と「固定ド」唱法の選択や是非についての論議（1970 梅本）（1970 荻谷）（1970 呉）（1979 三善晃）（1979 東川）（1991、1992 古田）、唱法問題の歴史的研究（1993 古田）（2005 小長野）（2009 長谷川）、ハンガリーのコードイシステムにおける移動ドの紹介（1980 コダーイ）（2001 フォライ、セーニ）や日本への応用（1991 フォライ）（2009、2010、2011、2013 尾見）、理論的研究（1985 東川）等が多数を占めている。階名指導における方法論の欠如と必要性が指摘されながら（2009 尾見：85）、実際の視唱内容から音楽的分析を試みて階名指導法上の現状の課題を見出そうとする研究は見られない。

そこで本研究では、現在教育大学幼児教育専攻に在学中の学生を対象に階名唱課題を視唱させ、被験者の視唱内容の分析を通して現状の階名唱の実態と問題点を知ると共に、視唱指導の改善を考察するための基礎資料としたい。

尚、本研究は京都教育大学教育学研究科在学時より継続して「楽譜から聴取することなく音高把握できる能力の指導法」を研究しているものであり、旋律の音程の把握に視点を絞って考えたい。

II. 実験調査の内容と方法

1. 本実験調査に至るまでの経緯

本実験調査は2010～2012年に実施した実験調査の結果(2013a 吉田)をふまえておこなう継続研究であるので、2010～2012年の実験の内容と結果について簡単に述べたい。

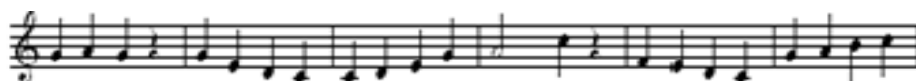
楽譜から旋律の音高を把握して歌う手順を細かく段階に分けると、まず楽譜上の音符を見て素早く階名を読み取り、次の段階として階名を正しい音程で歌うことが必要である。つまり、楽譜から音高を把握して歌うためには、「楽譜上の音符の位置から素早く階名を読み取ることができること」と「読み取ることができた階名から正しく旋律を把握して歌うこと」の2つの技術的段階がある²。そこで、この2つのどちらの技術的段階により多く問題があるのかをはっきりさせる必要がある。

そこで、楽譜上から把握する場合と、カタカナによる階名から把握する場合の音程認識を比較するために、2010年から2012年にかけて³同一被験者に対し、同じ視唱課題を「カタカナによる階名課題」（以下、「カタカナ」と、「五線上の楽譜課題」（以下、「楽譜」）の2つの方法で提示し、2つの視唱内容を比較する実験をおこなった。以下に「カタカナによる階名課題」と「五線上の楽譜」課題を示す。【資料1ab】

【資料1a】カタカナによる階名課題

① ソラソ ②ソミレド ③ドレミソラド ④ファミレド ⑤ソラシド⁴

【資料1b】五線上の楽譜課題



実験の結果、正しく視唱できなかった被験者は、「楽譜」、「カタカナ」の2つの方法による視唱内容を比較して、「カタカナ」のほうが良いわけではなかった。視唱の際に「楽譜上の音符の位置から素早く階名を読み取ることができない」ことが問題である場合は、「カタカナ」の方が「楽譜」で視唱課題を提示されるよりも音高把

握が容易く、視唱内容も良いはずである。このことから、実験において正しく視唱できなかった被験者は、「楽譜上の音符の位置から素早く階名を読み取ることができない」のではなく、楽譜上の音符の位置から階名は読み取ることができるにもかかわらず、「階名から正しく旋律を把握して歌うことができない」と推察された。

さらに、視唱課題を「楽譜」で提示する場合と、「カタカナ」で提示する場合での音程認識について比較して分析の結果、以下の3点があきらかになった。

- ① 「楽譜」から正しく視唱できた被験者は、提示された「カタカナ」の5題すべてにおいて、特に指示が無かったにもかかわらず、「ド」が同一音高に統一されて同じ調性で歌っていた。
- ② 「楽譜」で正しく視唱できなかった被験者は、休符や5度の音程跳躍部分をきっかけに「ド」とみなす音高が移動し、調性が変わることが特徴であった。これらの被験者は「カタカナ」の場合も、5題の課題ごとに「ド」とみなす音高を変化させたため、旋律の調性が頻繁に移動した。
- ③ 「楽譜」で正しく旋律を把握できなかった被験者は、「楽譜」、「カタカナ」のどちらの視唱課題も、1曲を通して元の調性が維持されていなかった一方で、「ソラソ」「ファミレ $\underline{\text{ド}}$ 」「ソラシ $\overline{\text{ド}}$ 」等の2度音程で構成された課題だけをみると、それぞれ移動先の調性で、旋律の横の音程関係は正しく把握されている場合が多くみられた。

視唱課題を歌う際に、曲の途中の休符や広い音程をきっかけに所属調性が度々移動してしまう場合、階名は所属調性の音階に則って音程を相対的に把握する仕組みのため、旋律の音程を正しく把握することは不可能である。そこで、本実験は2010年～2012年の実験結果をふまえ、5題の「カタカナ」課題を提示して「所属調性が維持されるかどうか」に視点を置いて追試をおこなう。さらに課題に含まれている「2度、3度、5度」の旋律の音程把握の現状について詳細に分析する。

2. 実験調査の方法

調査対象：K教育大学幼児教育専攻2回生15名

調査日時：2014年5月22日

実施方法：

実験調査の実施方法は2010年に実施した際と同じである。実験調査は大学の教室内で実施し、被験者は予告時間に4階待機室から1人ずつ3階の調査室に降りてくるように依頼した。課題の実施にあたり、「つながっている1つの曲のように」歌うように指示を追加して下記の説明をおこなった【資料2】。

【資料2】実験実施時の説明

ここに書いてある階名の音を、つながっている1つの曲のように、リズムを付けずに歌ってください。
階名の下に下線があるドは下のド、上に線があるドは上のドを歌ってください。

調査内容：

階名で提示する視唱課題は2010年に実施したものと同じである。紙面に書かれた階名は5題で①ソラソ、②ソミレ $\underline{\text{ド}}$ 、③ $\underline{\text{ド}}$ レミソラ $\overline{\text{ド}}$ 、④ファミレ $\underline{\text{ド}}$ 、⑤ソラシ $\overline{\text{ド}}$ のように、カタカナで提示した。これらの課題は含まれる音程にそれぞれねらいを持たせて選定している。それぞれのねらいは下記のとおりである【資料3】。

【資料3】階名視唱課題のねらい

① ソラソ	長2度音程の上下行であり、もっとも初歩的な音程。
② ソミレド	短3度の下降音程を含む。
③ ドレミソラド	短3度の上行音程を含むオクターブにわたるペンタトニック音階。
④ ファミレド	半音を含む4音の長音階順次進行下降形。
⑤ ソラシド	半音を含む4音の長音階順次進行上行形。

Ⅲ. 調査結果の分析と考察

1. 音程の把握と視唱内容

5題のカタカナによる階名視唱課題それぞれに含まれる音程のうち、各被験者が把握できたものを○、正確に把握できなかったものを×として表した⁵⁾【資料4】。

【資料4】カタカナによる階名視唱課題に含まれる音程の把握

課題 No.	ソラソ 正答12人		ソミレド 正答7人			ドレミソラド 正答5人					ファミレド 正答5人			ソラシド 正答11人		
	ソ ラ	ソ ラ	ソ ミ	ミ レ	レ ド	ド レ	レ ミ	ミ ソ	ソ ラ	ラ ド	フ ア	ミ レ	レ ド	ソ ラ	ラ シ	シ ド
A	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○
B	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
C	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
D	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
E	○	○	×	○	○	○	○	×	○	×	×	×	○	○	○	○
F	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○	×	○	○	○
G	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○
H	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○
I	×	×	×	○	○	○	×	×	○	×	×	○	○	○	○	○
J	○	○	×	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○
K	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	×	×	○
L	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
M	○	○	×	○	×	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	×
N	○	○	×	×	○	○	×	×	○	×	×	×	○	○	×	○
O	○	○	○	○	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○
正しく 歌えた 被験者 数(人)	13	12	7	13	13	13	12	5	12	6	9	9	11	13	12	13

【資料4】から課題に含まれる音程の把握について以下のことがわかる。

- ① 「ソラ」、「ミレ」、「レド」等の長2度音程上下行は正しく歌えている被験者が15人中12、3人の場合が多く、比較的よくできている。
- ② 「ソミレド」で「ソミ」の3度下降音程の把握ができる被験者は15人中7人で2度音程に比べできていない。
- ③ 「ドレミソラド」で「ミソ」、「ラド」の2回の短3度上行を正しく歌えた被験者は15人中5人で、完全に視唱できた3人を含め、全員5題の階名課題をほぼ正しく視唱できた被験者である。
- ④ 短2度音程は上行音程「シド」は正しく歌えている被験者が15人中13人であるのに対し、下降音程「ファミ」は正しく歌えている被験者が15人中9人と減少した。
- ⑤ 「ファミレド」では長2度と短2度の正確な歌い分けにミスが見られ、正しく把握できた被験者は15人中6人である。
- ⑥ 「ソラシド」では長2度と短2度「シド」を含むにもかかわらず15人中11人が正しい音程で歌えている。

次に、階名課題のうち、「ドレミソラド」から「ファミレド」をつなげる時の「ドファミ」の完全5度下降音程、「ファミレド」から「ソラシド」をつなげる際の「ドソ」の完全5度上行音程の2か所の音程の把握を分析した【資料5】。【資料5】からわかるように5度音程上行下降を共に把握できたのは、視唱課題を完全に視唱できた被験者C、被験者D、被験者Lの3名のみであることから、5度音程の把握と視唱力とは関連性が推測される。

【資料5】階名視唱課題の5度音程の把握

課題 階名 音程関係 被験者名	No.1「ドレミソラド」 → No.4「ファミレド」	No.4「ファミレド」 → No.5「ソラシド」
	下-ファミ 完全5度下降	ド-ソ 完全5度上行
A	×	×
B	×	×
C	○	○
D	○	○
E	×	×
F	×	×
G	×	×
H	×	○
I	×	×
J	×	×
K	×	×
L	○	○
M	×	×
N	×	×
O	×	×
正しく歌えた被験者数 (人)	3	4

【資料6】階名視唱課題の調性維持

課題 着目点 被験者名	No.1「ソラソ」→ No.5「ソラシド」 同一音高かどうか (調性維持)
A	×
B	×
C	○
D	○
E	×
F	○
G	○
H	○
I	×
J	×
K	×
L	○
M	×
N	×
O	×
被験者数(人)	5

以上の結果から、音程については、長2度音程が比較的どの階名においても正しく把握されているのに対し、

「ソミ」「ミソ」「ラド」の短3度音程【資料4】や、「ドファ」「ドソ」の完全5度音程【資料5】の把握水準は低い。「2度音程に比べ、3度音程や5度音程の把握ができていない」ことは、2012年に実施した実験調査の結果と一致する(2012:吉田149)。尚、階名課題のうち、3度音程と2度音程(全音)の混在するNo.3の課題「ドレミソラド」のペンタトニック音階を把握できる被験者は、視唱課題全体を正しく把握できていた【資料4】。次に、視唱する際の調性の維持について述べる。

2. 調性の維持と視唱内容

本実験でも、2012年の実験時と同様に、課題5題を同一の調性で一貫して歌う被験者と、課題によって調性を度々移動する被験者に分かれた。「階名課題」No.1の「ソラソ」の「ソ」とNo.5の「ソラシド」の「ソ」の音高が同一であると考えられるのは6人である【資料6】。階名は、調性が安定して1つの調性を維持していない場合は旋律の把握はできないため、6名以外の被験者は階名で旋律全体の輪郭も把握できていない。

「階名課題」No.1の「ソラソ」の「ソ」とNo.5の「ソラシド」の「ソ」の音高が同一である6人の中には、No.1からNo.5まで一貫して調性が維持されて完全に課題を正しく歌えた被験者C、被験者D、被験者Lの3名と、途中の音程に間違いがある被験者F、被験者G、被験者Hの3名の被験者に分けられる。そのうち後者の3名の被験者の視唱は、途中一部音程が違うにもかかわらず、全体としてはほぼ歌えているような印象を受ける。そこで、正しく視唱できていない2人の被験者のうち、調性を維持できていない被験者Iと調性を維持できている被験者Hをとりあげて視唱内容を比較検討したい。以下に示す【資料7】は、被験者Iの「ファミレド」「ソラシド」視唱を採譜したものである。

【資料7】被験者Iの視唱

この視唱では、「ファミレド」「ソラシド」の部分ごとの横の音程関係は長2度(全音)短2度(半音)の位置も正確である。しかし、この視唱は旋律全体像を正しく把握できていない。階名は、調性に応じて自由な音高の主音「ド」を定める仕組みだが、今、この旋律は「ファミレド」の部分はCを「ド」とするハ長調として、「ソラシド」の部分はAsを「ド」とする変イ長調として歌われているように思われる。つまり5度音程の跳躍をきっかけに、2つのフレーズは調性が維持されていないため、この視唱に仮に和声的な伴奏をつけると、次のようになる【資料8】。

【資料8】被験者Iの視唱(和声伴奏付き)

このように和声的な伴奏をつけてみると、「ファミレ $\underline{\text{ド}}$ $\overline{\text{ソ}}$ ラシ $\overline{\text{ド}}$ 」は「 $\underline{\text{ドソ}}$ 」の5度音程を把握できないことをきっかけとして、1つの調性でつながって感じられていないことがわかる。比較のために「ファミレ $\underline{\text{ド}}$ $\overline{\text{ソ}}$ ラシ $\overline{\text{ド}}$ 」の音程を正しく把握している場合の和声的な伴奏を仮につけると、次のようになる【資料9】。

【資料9】 課題の和声伴奏

C: C: C:

ファミレ $\underline{\text{ド}}$ $\overline{\text{ソ}}$ ラ シ $\overline{\text{ド}}$

上記のように、正しく視唱できている際は、「 $\underline{\text{ドソ}}$ 」の背景に同じ調性の「 $\underline{\text{ドミソ}}$ 」のIの和音を感じていると考えられる。このことから、「 $\underline{\text{ドソ}}$ 」の部分で調性が維持されないのは、「 $\underline{\text{ドソ}}$ 」の階名から背景のIの和音が感じられていないためではないかと考えられる。旋律的なフレーズの音程関係は正しく把握できているので、この被験者の場合は階名と和声的な感覚を連結させ、調性感を安定させる指導が必要と考えられる。

では次に被験者Hの「ファミレ $\underline{\text{ド}}$ $\overline{\text{ソ}}$ ラシ $\overline{\text{ド}}$ 」視唱の採譜を示す【資料10】。

【資料10】 被験者Hの視唱（被験者の歌った音高のまま）

× × ×

As: ファ ミ レ $\underline{\text{ド}}$ $\overline{\text{ソ}}$ ラ シ $\overline{\text{ド}}$

この視唱では、「ファミレ $\underline{\text{ド}}$ 」において本来「短2度-長2度-長2度（半音-全音-全音）」とつながらなければならない旋律的音程が、「長2度-短3度-長3度」となっている。階名と正しい音階音程が正しく結びついておらず、音程把握が正しくできていない。しかし、この視唱を【資料9】と比較するためにハ長調に移調して和声的な伴奏をつけると次のようになる【資料11】。

【資料11】 被験者Hの視唱（ハ長調に移調）

× × ×

C: ファ ミ レ $\underline{\text{ド}}$ $\overline{\text{ソ}}$ ラ シ $\overline{\text{ド}}$

この【資料11】に示した被験者Hの和声伴奏は【資料9】の正しく音程を把握できた例と比較すると、↑で示した部分以外は、同じ和声の伴奏になっている。つまり、「ファミレド」の旋律的な音程の把握は間違っているにもかかわらず、被験者Hがここで旋律の背景に感じている和声はほぼ正しい。このことが、旋律の音程の把握は正しくないにもかかわらず、ほぼ視唱できているような印象を受ける一因と考えられる。被験者Hが、より正しく視唱できるためには、階名と音階音程を正しく連結させる練習が必要だろう。

被験者IとHの視唱内容の比較から、階名唱による旋律の視唱においては、音程の把握と旋律の和声を感じるこの両立が重要である。旋律音程を部分的に正しく把握しても、5度音程の跳躍等をきっかけに調性を逸脱すれば、全体的な旋律の把握はかなり不正確となる。階名で旋律の音程を正しく把握させるためには、旋律を構成する音階を階名と正しく連結させて音程を正確に把握させることと同時に、旋律の和声を感じさせ、安定した調性感を育成する必要がある。

IV. 階名唱指導の課題についての考察—まとめと今後の課題

今回、学校音楽教育を9年間経験してきた大学生の被験者の半数以上が、簡単な階名による旋律を正しく視唱できなかった。2012年の実験と合わせて、大学生のべ28名について視唱できなかった被験者の視唱内容を個別分析した結果、現状の階名唱の1つの問題点が提示された。理論上階名は、音高が把握できる音感が無くても相対的な感覚で旋律の音程が把握でき、視唱力を身に付けるうえで無理なく平易であるはずである。しかし、階名では、どの音高でも調性の主音「ド」になり得るために、実際の被験者の階名視唱の内容を詳しく検討すると、1曲の中で「ド」を複数感じてしまう結果、旋律全体を正しく把握できていない事例が多くみられた。音感を持たない被験者が、旋律に含まれる広い音程の部分等をきっかけに主音「ド」が移動する場合、多くは無意識ではないかと思われる。階名は、転調を含む楽曲では読み替えが煩雑になるため不向きであることは従来指摘されてきたが(1970 梅本)(1979 三善)(1992 古田)、転調を含まない楽曲でも無意識に「ド」が移動するために旋律を正しく把握できていないことがわかった。

視唱する際に、1曲の途中で「ド」が移動して階名が正しく機能できない一因としては、旋律に和声を感じていないことが考えられる。コダーイは「1声歌唱(斉唱)の音程は、2声歌唱の練習においてのみ、本当に習得することができる」(1980 コダーイ:124)と述べている。「ドミ」の3度音程や「ドソ」の5度音程は、Iの和音を構成する音程として感じさせることに加え、「ド」と「ソ」は調性音楽の主音と属音として感じさせることも調性感を安定させるうえで重要である。階名唱で成果を上げているハンガリーのソルフェージュ教科書には、IとV(V7)の終止のバスラインである完全4度「ソド」や、完全5度音程「ソド」と旋律を弾き歌いしたり、バスラインの短2度音程「シド」と旋律を共に階名唱して聴き合ったりするなど、曲中の終止部分を探り上げて階名唱する練習が多く見られる⁶。階名を用いて正しく視唱できるように指導するには、コダーイが言うように、初歩の段階から常に旋律の流れと和声を2声で並行して感じさせる指導法を、教師が習得することが必要だろう。

階名と音階音程を関連付けることについては2012年の実験結果と同様に、今回も2度音程は比較的把握されていた反面、3度音程や完全5度音程の把握は不十分であった(2012 吉田)。2度、3度音程を含むペンタトニック音階が使われている日本の童謡や唱歌等を階名唱させることは、西洋音階の階名と音程を習得するための練習として平易で有効な方法の1つであると思われる。

以上のように階名を使用した視唱指導においては、調性に則った音階音程と階名の正しい関連付けの習得、和声感、安定した調性感など西洋音楽の基盤の育成が必要であり、さらに生徒に必要な指導内容を見極めなくては

ならないことから、教師の専門的な指導と継続が重要な鍵になる。小学校では音楽科を専科教員が担当しないケースも多い現状で正しい階名唱指導を行うためには、こうした指導ができるような教員養成や指導の手引となる教科書の充実とともに、子どもの年齢に応じた指導の段階をより明確にしていく必要があるだろう。

今後は、様々な被験者の視唱データの分析を基礎資料としながら、簡単な楽譜から聴取することなく旋律を把握できる視唱力を指導するために、安定した調性感や音階を育成する方法や教材について研究を進めたい。さらに旋律の把握におけるリズムの把握についての研究も今後の課題である。

- 1 笹野は、音楽科ではリコーダーがうまくふけない、歌を音程正しく歌えない、楽譜が読めないなどの技術が劣る「できない人」が「できる人」になるための技術的修練の道筋や、技術的トレーニングの努力がわかりにくい点を「見えにくい道筋（努力）」というカテゴリーにまとめている（2013 笹野：248）
- 2 丸山は読譜について、①楽譜に書き表された音符等を読み取ること、②楽譜を見て読み取った情報を音楽として表現すること、③楽譜が表現する内的表象を得ることの3つの段階があると指摘している（1994 丸山：37-38）。このうち、③は音を出さなくても音楽がイメージできる専門的な能力段階を指していることから、ここで採り上げる視点は①と②の2つの技術的段階に相当すると思われる。
- 3 前回の調査時の音の記憶が残ることを考慮して、1年以上の間隔をあけている。1回目カタカナによる階名による実験が2010年11月、楽譜による実験は2012年7月に実施している。（吉田：2013a）
- 4 本論文中、カタカナで示す「ド」は階名を表している。「ド」「下」のように上下の線はそれぞれ「上のド」「下のド」を表している。
- 5 被験者の視唱を録音したものを後日、ソルフェージュ指導に20年以上携わった経験を持つ筆者が同一の判断基準で採譜した楽譜をもとに把握できていた音程を○×で示した。
- 6 ハンガリーのソルフェージュ指導で用いられる教科書『音の世界』には和声感や機能感について多くの指導の実例をみることができる（吉田2013b）。

【引用・参考文献】

- 梅本堯夫（1970）「唱法についての心理学的考察」『音楽教育研究』50巻、pp. 30-37
- 小川容子（2005）「公教育における音名唱指導の実態—質問紙調査による移動ド・固定ド唱法の比較—」『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第1巻第2号、pp. 41-53
- 尾見 敦子（2009）「提言『読譜教育』の4つの視点—ハンガリーの音楽教育に学ぶもの』『音楽教育ジャーナル Vol. 7No. 1、pp. 76-86
- （2010）「小学校におけるリズム教育の出発点—日本とハンガリーの音楽教科書の比較を通して—」『川村学園女子大学研究紀要』第21巻第2号、pp. 1-18
- （2011）『移動ド唱法』による読譜力育成の授業実践』『全国大学音楽教育学会研究紀要』第22号、pp. 21-26
- （2013）「コダーイ・コンセプトに基づく音楽非専攻生のためのアカペラ合唱の教育実践」『川村学園女子大学研究紀要』第24巻第2号、pp. 16-31
- 荻谷納（1970）「専門教育につながる基礎教育を」『音楽教育研究6』50巻、音楽之友社、pp. 102-105
- 呉暁（1970）「理論的理解の下での共存」『音楽教育研究6』50巻、音楽之友社、pp. 105-107
- コダーイ・ゾルターン（1980）中川弘一郎訳『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践』全音楽譜出版社
- 小長野隆太（2005）「小学校音楽科における聴唱・視唱に関する内容の歴史的検討（3）—『教育音楽小学版』（1989年4月～2005年11月）の記事内容を中心に—」『中国四国教育学会教育学研究紀要』第51巻、pp. 552-557
- 斉藤隆（2009）「唱法再考—今、学校教育現場ですべきことは何か—」『音楽教育学』第39-2号（通巻78号）、日本音楽教育学会、pp. 53-54
- 笹野恵理子（2013）「大学生の『語り』にみる学校音楽カリキュラム経験—ナラティブ・アプローチによる『経験された』カリキュラムの実証的解明—」『関西楽理研究』第30巻、pp. 242-253
- （2013）「学校カリキュラム経験の研究—学校音楽文化研究への視角」『音楽教育学』第43巻第1号、pp. 42-49
- 杉江淑子（2007）『教科「音楽」の授業内容と学力に関する調査』科学研究費補助金研究「音楽科における教育内容の縮減と学力低下の様相」（18330190 研究代表：小川容子）教師調査班調査報告書
- 東川清一（1979）「固定ド反対！！—三善論文によせて—」『音楽芸術』第37巻第3号、pp. 54-57
- 東川清一（1985）『移動ドのすすめ：正しい読譜法と視唱指導』音楽之友社
- ドブサイ・ラースロー著・伊藤直美訳『新しいソルフェージュ指導書 音の世界』全音楽譜出版社
- 長谷川恭子（2009）「中野区立江古田小学校の研究にみる読譜指導の在り方—文部省実験学校と大川内富士一の実践を中心に—」『音楽教育実践ジャーナル』vol. 7 no. 1 日本音楽教育学会、pp. 113-123
- 畑中浩美（2009）「読譜指導は必要か—楽譜のよさに気づかせて学ぶ意欲につなげるために—」『音楽教育実践ジャーナル』vol. 7 no. 1 日本音楽教育学会、pp. 33-41
- フォライ・カタリン、セーニ・エルジェーベト（2001）羽仁協子、谷本一之、中川弘一郎訳『コダーイシステムと

-
- は何か』全音音楽出版社
- フォライ・カタリン(1991)知念直美編 畑玲子訳『わらべうた音楽の理論と実践—就学前の音楽教育—』明治図書出版
- 古田庄平(1991)「読譜のための音感と唱法の問題について[1]—〈固定ド〉と〈移動ド〉の問題を根底に—」『長崎大学教科教育学研究報告』第17号 pp. 23-29
- 古田庄平(1992)「読譜のための音感と唱法の問題について[2]—〈固定ド〉と〈移動ド〉の問題を根底に—」『長崎大学教科教育学研究報告』第19号 pp. 33-47
- 古田庄平(1992)「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷について[VII]—〈固定ド〉と〈移動ド〉の音感と唱法の問題を根底に—」『長崎大学教科教育学研究報告』第20号 pp. 43-57
- 別宮貞雄(1979)「併用したい音名唱法と階名唱法—三善、東川氏の論争に対して」『音楽芸術』第37巻第9号、pp. 60-63
- 丸山太郎(1994)「音楽的読譜能力形成に向けた読譜指導法について(試論)」『東京学芸大学紀要第5部門』46巻 pp. 33-48
- 三善晃(1979)「子どもの可能性を奪うもの—義務教育における音楽教育の諸問題」『音楽芸術』第37巻第1号、pp. 34-37
- 吉田直子(2012)「教員養成課程の学生が抱える問題の原因についての考察—旋律の音高を感じるための基礎的な能力を視点として—」『関西楽理研究』第29巻 pp. 141-151
- (2013a)「音楽的要素を感受させる指導の考察—ソルフェージュ指導書『音の世界』から[共通事項]の指導法を探る—」『関西楽理研究』第30巻 pp. 99-106
- (2013b)「階名唱指導における課題」『京都教育大学教育実践研究紀要』第13号 pp. 99-107